

紅葉の山を隔めた畑からは、雪をいたいた北アルプスが遠くに見える。  
美しい四季の自然に毎日飽きることなく感動しています。そして人間味の生活にとっても満足しています。と奥さま。



四賀梶原農園

# 梶原 啓

自由であることの心地良さを実感  
素人でも農業を始められる  
というモデルケースになりたい

海城中学校・高等学校を卒業後慶応大学へ進学。

10年間のサラリーマン生活を経て、長野県松本市四賀地区に移住、就農した梶原啓さん。

そのきっかけや有機農業へのこだわり、将来の夢など、  
奥さまとの二人三脚で生きる「今」を語っていただいた。

取材・文 戸谷美津子

農業が大変だということを知らなかつたからできた

——就農する前はどんなお仕事をしていたのですか？

大学、大学院では公共政策を専攻し、卒業後はある会社に就職して内外の道路政策に関する研究をしていました。例えば、道路ができたらどんな経済効果を生み出すかという調査です。公共事業という性質上国政にかかわってくるわけで、国会の会期中は徹夜で待機する日が続くこともありました。

——10年間のサラリーマン生活に区切りをつけて、農業に転職したのはなぜですか？

就職して3年目に結婚したのですが、仕事がそんな状態だから妻とはずっとすれ違いが続いていました。このままサラリーマンを続ければ、10年後も20年後も同じ生活が続くことは必須です。そう考えた時、これは自分たちが望んでいる生活ではないと強く思うようになりました。

妻とは「一緒に仕事ができたらいいね」という話をよくしていました。そんな中で、日本の食糧自給率はわずか30%しかない、それはなぜ？自分たちができることはある？と話が盛り上がりつついき、それなら自分たちが農

業をやるうという気持ちになつていったんです。就農することを前提に自治体が主催する就農セミナーに参加したところ、成田空港で行われている有機栽培の話が非常に心に残りました。自分たちが目指す農業はこれだ！と思ひ、夫婦で成田にアパートを借りて1年間有機農業研修を受講しました。

——かなり思いきった転職ですね。不安はありませんでしたか？

実は僕の親戚にも妻の親戚にも、農業をしている人が誰もいないんです。だから農業は大変だ、もうからないよということも誰も教えてくれなかつた（笑）。農業の大変さについて何も知らなかつたからできたんだと思います。それと、農業を始めるきっかけの一つに、「地域のコミュニティとかかわりながら暮らしていきたい」という思いがありました。大学卒業後2年間ニューヨーク州立大学に留学していたのですが、大学はカナダの国境に近い田舎町にありました。そこでは地域の助け合い、地元の付き合いというのがちゃんと残っていて、いいなあ、うらやましいなあと思つていました。会社員時代に暮らしていた目黒のマンションは引越してきた人たちの集まりで、同じフ

転職して感じるのは、自由であることの心地よさ



ローアーにどんな人が暮らしているのかも知らない。そんな暮らしは味気ないですよ。ですから、帰国後は地域に根差す暮らしをしようと思っていたので、四賀に移住するのも迷いはありませんでした。

一方、外国で暮らしていると日本のいい点も見えてくるんですね。天皇制が残っているのはすごいと思うし、日本の伝統文化は素晴らしいと思うし、日本気が付きました。四賀では今でも水

神様を敬っているし収穫祭もみんなでする。そういう伝統文化にかかわれるのも、僕にとって農村で生活する喜びの一つです。

——松本で就農して3年目の現実、また心境はいかがですか？

元手のない新規就農者ですから、食べていくため、地域の生活に溶け込むため、まさに貧乏暇なしの生活です。3年目でやっと農業だけで食べていけるようになりましたが、はじめの2年間は夕方から家庭教師のアルバイトをしていました。

転職して感じるのは、なによりも自由であることの心地よさ、そして自然に囲まれながら仕事ができる喜びです。自由とはいっても仕事である以上成功させなければなりません。どうしたらもつとおいしい野菜が作れるか、もつとお客様に喜んでいただけるか、考えるのは仕事のことばかりです。でも時間配分の裁量も決定権もすべて自分にある。仕事には会社員時代以上に情熱と喜びをもつて取り組んでいます。地域の人々も温かく受け入れてくれて、球技大会や駅伝、早朝野球、町の清掃や獣害対策など、さまざまな活動と一緒に汗を流しています。

——有機栽培にこだわった野菜作りを実践していますね。  
はい。農業に新規参入するには何

母の教育は

『しつても勉強も低学年のうちが大切』

かッリが欲しかったというのもありますが、一番の理由は「自然の循環を大切にしたい」と思っているからです。自然の草木が肥料や農薬を使わなくても育つのは、光合成によって自ら養分を作るのももちろん、朽ちた動植物が土中の微生物によって分解されることで土に還り、他の草木に吸収されるという自然の循環があるからなんです。ですから当農園ではこの循環を畑で再現する土作りを大切にしています。

化学肥料や牛ふん、鶏ふんなどの動物性肥料は使わず、米ぬかやもみ殻、落ち葉、野菜の残滓(ざんし)などの有機物を肥料として使っています。農薬はいつさい使いません。バランスの良い食生活を送っている人は病気にかかりにくく薬がいらないうと同じで、養分のバランスが良い畑で育った野菜は健康で虫に食われにくく、農薬を必要としないと考えているからです。

現在は1町歩(3000坪)の畑を借りて50種類くらいの野菜を作り、主に個人宅配、その他自然食レストランや学校などで買っていたいただいています。



8月真夏の黒豆畑

東京では港区にある『SABOU・SIGA s i r o k a n e』という自然食レストランで使っていたいただきます。

——話は変わりますが、海城時代はどんな生徒でしたか？  
今はキャリア教育や人間教育にも力を入れて聞いてきましたが、当時はまだ「目指せ東大」二辺倒の時代。とにかく詰込み型教育でした。高校



ではバレー部に入り、試験前1週間以外は部活に集中していました。それは先輩たちもみんな同じなんです。それでもきちんと結果を出していた。だから自分もそうするのだと単純に思っていました。

### ——家庭での教育は？

母親はバランスのとれた賢い人だったと思います。しつこく教育も低学年が大切だと考えていたようで、小学校の時はすでに「勉強しないと不安」という体質になっていました(笑)。でも、勉強のことを含めて中学以降は何も言われませんでした。

弟は僕とタイプが違っていて、小さい時から絵が得意で美大へ進み、今は

ゲームのデザイナーをしています。そんな生き方を見ていると、小さい頃に好きなことを見つけていることができた弟をうらやましく思います。僕は特に特技もなかったら将来の保障のために勉強をしたようなもんで。最終的に農業にたどりついて幸せに暮らしています。人間、好きなことを見つけられたら幸せだとつくづく思います。

——この3年間は奥さまの協力がとても大きかったと思うのですが？

もちろんです。就農セミナーでも二人では無理だけど、夫婦二人ならなんとかなる」と励ましてもらいましたが、まさにその通りです。妻が自分で考え自分で行動できる人間だから「1+1=2」になるので、僕の脳みそ一つだったところまで順調にいかなかったと思います。仕事についても、僕はおいしい野菜を作ることだけを考えていたのですが、妻はお客さまの手元に届いた時に見た目が華やかなことも大切だから赤いピーマンを入れるなど、配色に気を配った野菜作りをしてくれました。その他にも定番の野菜以外にもハーブを入れる、料理のレシピを添え

るなどいろいろ工夫してくれて、本当に心強いパートナーです。

### ——そんなお二人の将来の夢は何？

農業は素人が始めてもできるというモデルケースになって、それを発信していきたいですね。そうすることが社会への恩返し、貢献になると思っています。そのためにも将来は農園を法人化して、増え続けている休耕地の活性化を図りたい。それが僕たちを「兄ちゃん、姉ちゃん」と温かく受け入れてくれた地域への貢献にもつながると信じています。

ホームページは英語版も載せているし、有機農業の最新知識を得るには、バイオの最先端を英文で読む必要があります。そんなことを考えると、若い時にしたこと役に立たないことな



将来は法人化して休耕地活性化の一助を担い、地域社会に貢献していきたい

ど何もない、してきたことに無駄がないんだと感じます。そして若いうちに転職して、本当に良かったと思っています。

畑を案内していただいた際、水菜や小松菜をちよいとつまんで口に含みました。そのみずみずしさと味の濃さにびっくり。健康な土に根を張り太陽をいっぱい浴びて育った野菜たちは、野菜本来の味を蓄えているのだと感動しました。

中学受験をクリアし、有名大学に入り大企業に入社した。後悔はないが、でもそれだけがいいわけじゃない。自分の人生にはもっと大切なものがある。そんな梶原さんの考え方や生き方は、次世代の1つの規範になると思います。そして梶原さんのような人が増えれば、日本の農業だけでなく日本そのものが変わるに違いない、そんな確信を得たすがすがしい一日でした。

梶原啓  
(かじわらあきら)

平成6年海城学園卒。平成10年慶応大学卒業。平成12年ニューヨーク州立大学ポツダム校卒業。平成20年東京大学公共政策大学院修了。平成21~22年成田国際空港が実施する有機農業研修受講、修了。平成22年7月妻とともに長野県松本市郊外の四賀地区に移住、就農。

四賀梶原農園  
www.shigakajiwaranouen.jp/